

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	近世上層住宅における立花からみた接客空間の位置づけ
Title(English)	
著者(和文)	深田てるみ
Author(English)	Terumi Hukada
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第11022号, 授与年月日:2018年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:那須 聖,中村 芳樹,奥山 信一,山崎 鯛介,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第11022号, Conferred date:2018/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		深田てるみ	
論文審査 審査員		氏 名		職 名		氏 名	職 名
	主査	那須 聖		准教授	審査員	藤田 康仁	准教授
	審査員	中村 芳樹		教授			
		奥山 信一		教授			
		山崎 鯛介		准教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「近世上層住宅における立花からみた接客空間の位置づけ」と題し、以下の7章から構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景として、「もてなし」の原点としての茶道と比較し、華道においては茶室に相当する特徴的空間が生まれていない点を述べた上で、既往の研究において茶事が空間的な展開として建築との関係で論じられているのに対し、住居内の用法と設えの関係から花の特徴が建築の中で十分に位置付けられていないことを指摘し、本論文における「接客」、「接客空間」および「上層住宅」を定義した上で、研究の目的が、立花と座敷飾および御殿の用法の關係に着目し、花伝書に記されている花の飾付の格式を適用することで、近世上層住宅としての天皇、公家、武家、町家の住宅における接客空間の用法とその性格を明らかにするものであることを述べている。

第2章「後水尾天皇時代の内裏の御殿の用法」では、江戸時代の『専好立花図』に示された図中で立花の制作場所となっている建物の中から後水尾天皇時代の内裏の紫宸殿および小御所を取り上げ、史料である複数の指図と日記の照合から御殿の用法を検討し、紫宸殿における「立花御会」では公式の場として空間は「序（真）」の格式であるものの、立花からみた場合は花興行の時という「破（行）」の格式を示していること、また、内裏の小御所においては「嗜み」の空間として、立花からみると日常的な書院の座敷飾としての「破（行）」の格式を示していたことをそれぞれ明らかにしている。

第3章「寛永度後水尾院御所の御殿の性格」では、2章に続いて江戸時代の『専好立花図』に示された図中で立花の制作場所となっている建物から寛永度後水尾院の仙洞御所を取り上げ、『専好立花図』と日記を照合するとともに複数の指図と対照することで御殿の用法とそこでの花の形式を検討し、小御所・会之間は楽しみ及び稽古、御時佛堂は仏事の時、広御所は式正の時、御書院及び御茶屋は楽しみのための使われ方であること、初期の立花御会が稽古の目的であったのに対し、後期の立花は行事、儀式的飾付の一端を為すようになったことを指摘し、それぞれの接客空間の性格を明らかにしている。

第4章「公家住宅の御殿の性格」では、上層公家住宅の内、『専好立花図』以外にも日記・指図等が十分に得られた撰家の近衛邸、宮家の高松邸、門跡寺院の曼殊院をとりあげ、3章と同様に御殿の用法と花の形式を検討し、近衛邸では御成における主従の「もてなし」の接客空間としての対面所の性格と立花御会の稽古のための「嗜み」の接客空間としての性格を、高松邸では主従の「もてなし」の接客空間として常御殿の性格を、さらに曼殊院では御成において「嗜み」および主従の「もてなし」の接客空間としての性格を明らかにしている。

第5章「武家住宅の御殿の性格」では、『加賀藩史料』に示されている本郷邸への御成についての記録および、『南紀徳川史』に記されている竹橋邸への御成についての記録と赤坂邸への御立寄の詳細な座敷の飾付の記録から花と関連した飾付を取り出すことで、主従の「もてなし」の接客空間として御殿の用法と花の関係を検討し、江戸時代前期の紀州徳川家上屋敷竹橋邸への将軍御成の際に使用された御殿のうち、床に立花が飾られていたのは御広間と御成書院であったのに対し、江戸時代中・後期の将軍御立寄の場合は表御座敷の御書院と大奥御座敷の御座之間であり、4つの書院を対比すると表御座敷の御書院は御広間、大奥御座敷の御座之間は御成書院の性格を示していると考えられること、立花からも御成が序（真）の格式を示していることを明らかにしている。

第6章「近世の風俗絵巻にみる住宅内の立花について」では、町家も含め住宅内で立花が行われた具体的な場面を反映し、生活を室内までも含めて表現した資料として『近世風俗図巻』を取り上げ、そこに描かれた室内の構造、床の間、違棚、付書院、襖、その他飾り物等から花の種類と室内の用法を検討し、立花が武家および町家の座敷の床の間で行われ、花のある場面として、楽しみ、花興業、稽古の用法が見られること、「嗜み」、主従の「もてなし」の両方を取り入れていること、立花の形式からみると接客空間は破（行）と急（草）の格式があることを明らかにしている。

第7章「結論」では、以上を総括して、本論文の結論を述べている。

以上を要するに本論文は、接客の際に現れる立花と建築の関係について、江戸時代における近世上層住宅に関する史料を用いて、異なる接客のあり方から多角的に検討したものである。その結果、これまで明らかでなかった建築形式と御殿の用法および花の飾り付けの密接な関係として、立花が上位の格式を保ち続けることで、床を備えた接客空間の格式を保っていたこと、加えて、空間内の用法の展開に応じて花の飾付が多様化し、様々な場所で用いられることで、個人的な接客や公的な接客の性格が形成されていたことを明らかにし、上層住宅における接客空間の性格を位置付け、その展開を示している。以上は、しつらいとふるまいによって為される、建築内に瞬間的に現れる空間の在り様を示したものと、建築史における新たな知見を提示している。従って、本論文の成果は建築学および工学において貢献するところが大きく、本論文は博士（工学）の学位論文として十分価値のあるものと判断される。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。